



YOKOHAMA CIVIC ART GALLERY
横浜市民ギャラリー

横浜市民ギャラリーコレクション展2017

季節を めぐる

Yokohama Civic Art Gallery
Collection Exhibition 2017

Season in the Works

横浜市民ギャラリーには、1964年の開館以来、現代美術を紹介する年次企画展や姉妹都市との海外交流展、横浜ゆかり作家の個展等を機に収集してきた作品がおおよそ1,300点収蔵されています。横浜市民ギャラリーコレクション展は、毎年テーマを設けて収蔵作品を選び、その魅力を広く知っていただくために開催しています。

本展のテーマは「季節をめぐる」です。収蔵作品の中から春/夏/秋/冬に描かれたものや、各季節を感じさせる作品95点を展覧します。四季が明確な日本では、古来から季節により移ろう景色や風物が描かれてきました。当館の収蔵作品は戦後美術が中心です。横浜をはじめとした風景の季節ごとの表情や、油彩、日本画、版画、漫画、写真など技法による表現、作家ごとの視点の多様さなどをお楽しみください。

今回は2つの特集展示をあわせておこないます。特集展示1「馬場禰男の横浜百景」では、版画家の馬場禰男(1927-1994)がライフワークとして制作した連作〈横浜百景〉から一部をご紹介します。リトグラフをはじめ作品ごとに技法を凝らし描かれた、横浜市内の様々な場所・季節の作品を通じ、制作当時の横浜の風景や馬場のまなざしをご覧ください。

特集展示2は、ともに写真家の常盤とよ子(1930年生まれ)・奥村泰宏(1914-1995)の夫婦がそれぞれの視点で切り取った、敗戦後の横浜のまちなみと、力強く生きる人々の姿を撮影した作品をご紹介します。「戦後のひと・まち-常盤とよ子・奥村泰宏」です。同時期、近い場所に被写体を求めながらも、切磋琢磨しあい表現を磨いた二人の軌跡を振り返ります。

最後になりましたが、本展のためにご尽力いただいた関係者、関係機関の皆様にご心より御礼申し上げます。

横浜市民ギャラリー



横浜市民ギャラリー 展示室1、2

2017年3月3日[金]～19日[日] 10:00～18:00(入場は17:30まで)

入場無料 / 会期中無休

主催:横浜市民ギャラリー(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 / 西田装美株式会社 共同事業体) 後援:横浜市文化観光局

関連イベント

アーティストトーク「リトグラフと私と馬場禰男」

3月4日[土]14:00～15:30

会場:横浜市民ギャラリー 4階アトリエ

出演:園山晴巳(出品作家)

学芸員によるギャラリートーク

3月11日[土]14:00～14:30

会場:横浜市民ギャラリー 展示室1、2

鑑賞サポーターによるトーク

3月12日[日]、18日[土]14:00～

会場:横浜市民ギャラリー 展示室1、2

本展では公募した16名の鑑賞サポーターが活動しています。1/14、28、2/4、11の4日間の事前研修で、それぞれが選んだ出品作品について調べ、自身が受けた印象や感想を盛り込んだ文章を執筆しました。別紙「鑑賞サポーターによる作品紹介シート」に収録しています。また、上記日程でトークを開催します。

【鑑賞サポーター】青木 裕子、磯田 佐多子、大井 花歩、大杉 昭雄、小峯 恵理子、佐藤 秀治、佐野 康之、柴田 悦美、鈴木 敬子、鈴木 通弘、高瀬 啓司、竹内 誠一、中嶋 祐子、花村 未佳、三浦 章子、村松 繁

表紙:櫻庭 彦治《風景(札幌秋色)》1975年(※部分)



1 宮本 昌雄 《春雪横浜山手之図》
1995年 紙本着彩 175.0×225.0cm



2 添田 定夫 《春光の横浜港》
1988年 油彩、キャンバス 97.0×130.0cm



5 牛田 雞村 《『蟹港二題』より》
1926年 絹本着彩 63.0×112.8cm



6 相笠 昌義 《海水浴をする人》
1989年 エッチング、アクアチント 32.0×64.9cm



3 秋山 亮二 《『榑川村』より》
1989年 セラチン・シルバー・プリント 44.8×44.6cm



4 林 敬二 《横浜港》
1988年 油彩、キャンバス 91.0×116.0cm



7 北 久美子 《1988年 夏》
1988年 油彩、キャンバス 91.0×116.8cm



8 吹田 文明 《花火大会》
1988年 木版 57.5×44.1cm

春

Spring

長い冬が終わり、ほっとしたのもつかの間、寒の戻りがあるなど春の気候にはまだ不安定なところがあります。しかし芽吹く草木や次々に咲き始める花々を目にすると、気持ちがどこか華やぐ方も多いのではないのでしょうか。そんな行きつ戻りつする季節を描いたのが宮本昌雄《春雪横浜山手之図》(1)です。桜が咲きながらも粉雪が舞う、山手の住宅街の風景がファンタジックに描かれています。添田定夫《春光の横浜港》(2)は初夏に近い景色でしょうか。山下公園の生い茂った木々から見える横浜港の海面は穏やかで、人気がないためか静かな印象をたたえています。秋山亮二《『榑川村』より》(3)は写真集『榑川村』(1991年、朝日新聞社)に収録された作品です。榑川村にはかつて中山道の奈良井宿があり木曾漆器で知られましたが、2005年に隣の塩尻市と合併したため、現在村名は消失しています。秋山は2年間かけて撮影し、村の日常を記録しました。

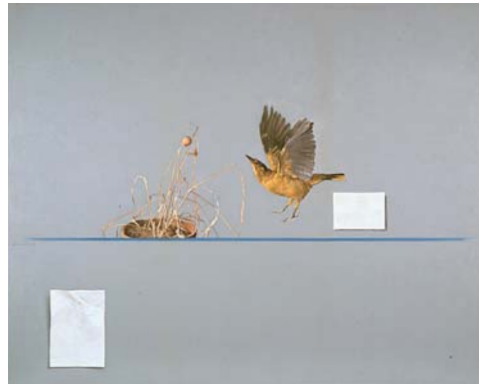
夏

Summer

夏にもさまざまな表情があります。初夏の爽やかな空気、真夏の強烈な日差しと海水浴など夏休みのレジャー、夕涼み、そして秋を迎える一抹の寂しさ。北久美子《1988年 夏》(7)は、細部まで写実的に描かれた雲ひとつない横浜港の風景です。画面奥には建設中の横浜ベイブリッジも見えます。前景の草花が生い茂り咲きほこる様や、それらに集まる蝶やトンボが短い生命の盛りをもらわしているかのようです。相笠昌義《海水浴をする人》(6)では、入江を背に海辺で集い思い思いに過ごす人々の様子がパノラマ的にとらえられています。人々に穏やかな眼差しを向けながらも、時が止まったかのような不思議な印象が感じられます。牛田雞村《『蟹港二題』より》(5)に描かれているのは明治期の中華街です。画面中央下の水兵の服装から、夏季であることがうかがえます。夕闇に浮かび上がるガス灯の青味を帯びた光が、往來をやさしく照らしています。



9 入江 泰吉 《斑鳩の里落陽》
1976年 カラー・プリント 73.4×93.2cm



10 阪本 文男 《帰ってからのアリスの遊び》
1975年 油彩、キャンバス 130.3×162.1cm



13 浜田 三郎 《操車場》
1988年 紙本着彩 80.7×100.4cm



14 志村 計介 《チューレリー公園》
1967年 油彩、キャンバス 53.0×65.0cm



11 野田 弘志 《“ポーターテラー”1963》
1990年 石版 23.0×28.7cm



12 櫻庭 彦治 《風景(札幌秋色)》
1975年 油彩、キャンバス 45.5×47.0cm



15 村上 善男 《R気団 76-7》
1976年 アクリル、コラージュ、キャンバス 194.0×130.0cm



16 小島 功 《サンタ横浜上陸》
1978年 アクリル、グワッシュ、水彩、紙 102.7×72.7cm

秋

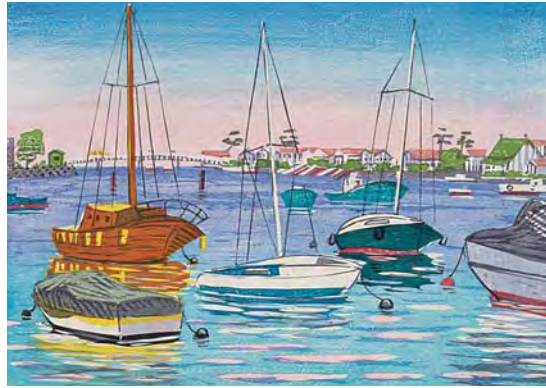
Autumn

紅葉した山や木々、収穫された野菜や果物など彩豊かな秋の風物は、多くの作家にあらわされてきました。入江泰吉は故郷の奈良を中心に、自然や古寺を写しました。飛鳥・天平の時代に思いをはせ、先人への敬意をこめながら万人の心にひびく作品を心がけたといいます。《斑鳩の里落陽》(9)では、夕日に美しく染まった秋の空の広さをとらえています。櫻庭彦治《風景(札幌秋色)》(12)は初秋なのか、鮮やかな緑色が画面の多くを占め、一見桜のようにも見える色づき始めた葉をつけた木々が描かれています。後方の白い建造物の硬い質感が、周囲の自然の表現と好対照を成しています。阪本文男《帰ってからのアリスの遊び》(10)では、剥製の鳥と植木鉢は正面から、白い紙は上方からという複数の視点で写実的に描きながらも、それらの背景を排除してキャンバス上に再構成しています。阪本は命を失ったものや無生物の“枯れた”モチーフの中に存在の本質性を見出していたといいます。

冬

Winter

冬の光景・印象は、雪の有無やその程度によってさまざまです。浜田三郎《操車場》(13)では線路の枕木が見えないぐらいの積雪量です。人気がなく静かな印象で、雲で覆われた空模様からは更に雪が降ってきそうな気配が感じられます。北海道よりも高緯度に位置するフランス・パリでも降雪は珍しくありませんが、同市内最古の公園を描いた志村計介《チューレリー公園》(14)では雪はまだ降っていません。しかしながら、葉が落ち切った木立、グレーを基調に描かれた空や地面からは冷え切った空気を連想させます。村上善男は生涯東北を基盤として制作をおこないました。村上は1960年代までは工業製品を樹脂で固めた作品を発表していましたが、1970年代は作家の内面を気象イメージに転化した気象シリーズを手がけました。《R気団 76-7》(15)には、温湿度を想起させるグラフや数字の描写、コラージュとともに、hard rime(霧氷)やfreezing rain(氷晶雨)などの気象用語が書きこまれています。



馬場は独学でリトグラフの技法を習得しました。初期の、頭をリボンに挿げ替えた人物を白黒で描いた風刺性の強い作品を経て、《横浜博覧会の図(中国の船)》(21)のようにカラフルな色彩を多用し、サーカスや遊園地など祝祭感の強い場所や場面を舞台に、鬼や架空の人物らをちりばめた作品を手がけるようになります。賑やかな一方、非日常的な全体の情景にどこか奇怪な印象も感じられる作風です。東京造形大学で後進の指導にあたったほか、

絵本の挿絵なども手がけました。

《横浜百景》は、馬場がライフワークとして制作した作品群です。タイトルを冠した表紙と思われる作品もあることから、将来的には出版を考えていたのかもしれませんが、横浜各地の四季折々の風景を、作品によって技法を使い分けて描き、横浜の表情の多様性をよくあらわしています。まちや自然、人々を見つめる馬場の視線とともに、時代の空気を感じることができます。

- | | |
|----|----|
| 17 | 18 |
| 19 | 20 |
| 21 | |
- 《横浜百景》より
 17 《平湯湾 八景にて》 1977年 木版 26.5×37.4cm
 18 《夕暮れの十番館》 1978年 リトグラフ 24.5×30.5cm
 19 《初詣で伊勢山神宮》 1978年 リトグラフ 31.1×22.1cm
 20 《横浜駅ホーム ルミネ8Fより》 1982年 リトグラフ 15.0×36.8cm
 21 《横浜博覧会の図(中国の船)》 1990年 リトグラフ 50.3×61.5cm

- 馬場 橋男(ばば・かしお)
 1927年 東京生まれ
 1962年 春陽展版画部に初入選(63年研究賞受賞、69年会員)
 1963年 日本版画協会展に出品(65年同協会賞受賞、67年会員)
 1968年 第6回東京国際版画ビエンナーレ出品
 1975年 神奈川版画アンデパンダン展の創立に参加
 1976年 現代児童画展の創立に参加
 1987年 「馬場橋男自選展」(横浜市民ギャラリー)
 ※その他展覧会多数
 1994年 逝去



常盤とよ子は女性写真家の草分けの一人です。学校卒業後、兄の影響や知人の勧めがあり写真を始めました。はじめは女性写真家団体「百合カメラクラブ」に参加しましたが、次第に港や街に被写体を求めるようになり、ひいては赤線地帯を撮影するようになりました。自身が女性であることを活用しながら女性の住まいにまで入り込んで撮影をおこない、時には危ない場面に遭遇したこともあったといいます。女性たちに肉迫しながらも親しくならず絶妙な距離感で切り取られた写真にはどれも背後に緊張感が漂います。

常盤の公私にわたるパートナーであった奥村泰宏は、終戦後、生まれ育った横浜の変わり果てた様子を目の当たりにし、占領下の市内を撮るようになります。奥村が対象としたのは、街中を闊歩する堂々とした占領軍と、対照的に貧しさから這い上がろうとしている市民の姿でした。市民をとらえた写真の中には疲労や悲壮感がにじむものがある一方で、希望を感じさせる元気な子どもたちの姿もみられます。常盤は奥村の写真のことを「自分のものより優しい」と話しています。

- 常盤 とよ子(ときわ・とよこ)
 1930年 横浜生まれ
 1951年 東京都立家政学院卒業
 1956年 初個展「働く女性」(小四六ギャラリー、銀座)
 ※以後展覧会多数
 日本写真家協会会員
 1957年 写真エッセイ集「危険な毒花」(三笠書房)出版
 1962年 テレビ映画「働く女性」シリーズ制作(〜1965年)
 1995年 神奈川県写真家協会会長
 2003年 横浜文化賞受賞
 2014年 神奈川文化賞受賞

- 奥村 泰宏(おくむら・たいこう)
 1914年 横浜生まれ
 1943年 文化学院卒業
 1949年 横浜写真作家倶楽部を発足
 1951年 横浜アマチュア写真連盟を結成。同理事長
 1952年 横浜美術協会会員(顧問)
 1970年 神奈川報道写真連盟理事長
 1982年 神奈川県写真家協会会長
 1984年 横浜文化賞受賞
 1985年 神奈川読売写真クラブ会長
 1990年 「奥村泰宏写真展
 いま甦るハマの写真の物語」(横浜市民ギャラリー)
 ※その他展覧会多数
 1995年 逝去

- | | |
|----|----|
| 22 | 23 |
| 24 | 25 |
| 26 | |
- 22 常盤 とよ子 《赤線地帯—横浜》 1955年 セラチン・シルバー・プリント 25.4×39.1cm
 23 常盤 とよ子 《お六さん—横浜》 1968年 セラチン・シルバー・プリント 25.4×39.0cm
 24 奥村 泰宏 《日ノ出町》 1952年 セラチン・シルバー・プリント 28.7×44.1cm
 25 奥村 泰宏 《似顔絵描き》 1950年 セラチン・シルバー・プリント 34.6×34.5cm
 26 奥村 泰宏 《職を求めてたむろする失業者・野毛町桜橋》 1949年 セラチン・シルバー・プリント 34.4×34.5cm

当館では平成26年より、企画展にあわせ横浜市民ギャラリーにゆかりのある方々のインタビューをおこなっています。今回は出品作家の常盤とよ子氏、浅見信夫氏にお話をお聞きました。

常盤とよ子インタビュー

赤線地帯の撮影

いつも同じ道を通っているとそこで出会う人がいて、あの人もおもしろいなと思っていたら、その人が赤線の女性でした。着ているものがちょっと普通の方と違っていたので、だいたいの人のがわかったんじゃないかな。それで赤線の写真を撮りましてね。私はカメラを下げていて、生意気だって後ろから石をぶつけられたりもしましたね。

この写真(*1)を撮っているとき、(見張りの人に見られていることに)気が付かなかった。「こらー」って追いかけて、でも私逃げ足が速かったので、日ノ出町のガード下まで来たら追いかけるのをやめちゃったみたいなの。あんまりいい状況で写した写真はありませんね。ちょっと低い位置で、すぐ逃げられるようにしゃがんで撮ったんです。

この中(*2)で私が好きな写真は、この写真(*3)なの。題名が《流行歌の合唱》っていうね。彼女たちにとってはわりと早い時間に向こうからやって来たんです。このさりげない写真は私はとても好きです。着ているものなんか朝早いからよれよれなのよね。

診療所の撮影

赤線地帯の女の人の収容されている診療所(*4)を写しています。その診療所の医者が私の写真に納得して、どんなところからでも撮りなさいと私に白衣を貸してくれました。それを着て2階に行ったり1階に行ったりしていいよと教えてくださいました。そういう方がいなかったら私の写真は写せなかったんじゃないかと思います。だからきっと必死だったんですね。

更生施設の撮影

更生施設(*5)を撮るといのは大変です。だって更生をした人たちを写して、顔を出したりなんかしたら大変ですからね。展覧会を東京でやるとき、すごく不安で「(この写真を展示して)いいのか」と(写っている女性たちに)尋ねました。そうしたら「あんただったらいいです」と言ってくれた人がほとんどだったの。「大丈夫だ。今はなんでもないんだから」と。考え方がすごいですね。

お六さんの撮影

お六さん(*6)は、男は家に喜んで入れてくれるけれど女はいやがるわけですよ。ですからお菓子を持って行ったり、「こごさせて」と、もうずいぶん通いましたよ。入口を開けてもらって入るのは大変でした。初めの頃はお六さんのうちもわりとといううちにね。それが私が通っているうちに、上を見ると空が見えたり、くしゃくしゃになっていきました。

*1 《窓 日の出町裏》 1955年



*2 写真集『戦後50年 横浜再現 二人で写した敗戦ストーリー』 奥村泰宏、常盤とよ子/1996年/平凡社

*3 《流行歌の合唱》 1955年



(※本展出品作ではありません。)

*4 1956～1957年に県立屏風ヶ浦病院、真金町診療所を撮影。

*5 1957年に赤線の女性たちが収容される 神奈川県内の更生施設を撮影。

*6 本牧のチャブ屋(=飲食店とダンスホールを兼ねた私娼窟)で人気を博した娼婦。戦後の焼け跡に小屋を建てて住んでいた。

大切な場所・横浜

横浜には船が定期的に入ってきてね、船会社の方が親切で、「明日入るよ」とか教えてくださり、とても協力してくださいました。伊勢佐木町に行ったり、あのへんをあっち行ったりこっち行ったりしていましたね。野毛も桜木町も近いし。考えてみると、あそこいらが私の写そうとする大切な場所だったんだと思いますね。どうして私がそういうものを写すようになったかと言うと、泰宏さん(*7)の影響もありますけれど、当時は写真というときれいなお嬢さんにお洋服を着せてスタジオで撮影する写真が多かったんですよ。だからそういうものではないものを撮ろうとしたということがあります。泰宏さんも「それがいいんじゃないか」と言ってくれました。

横浜は私が生まれたところですから好きですけどね。なんとなくバタ臭くて気取っていないし。横浜って洒落ていると思わない?あまりお金なんか持っていないときでもね、私はなんとなく吹いてくる風が好きでした。今でも野毛を歩いているとその頃のことを思い出しますよ。何もない街に比べれば私はいいところでふらふら歩いていたんだと思いますね。

夫・奥村泰宏の思い出

その当時写真を撮っている女性というのはとても少なかったからね。奥村泰宏が少ない女性のなかから私に「(写真)をやってみないか。もしかするとものになるかもわからない」と言ってくれたので、カメラマンになったんです。奥村泰宏はやっぱりスマートでしたよ。あの頃、安い二眼レフなんかを肩からかけて、帽子をかぶったりしてね。高いというのではないけれど、いい格好をしていましたよ。

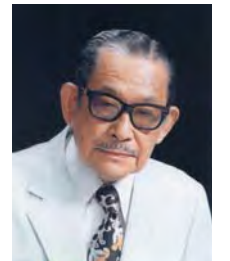
奥村泰宏と一緒に赤線地帯に行ったとき、逃げて私を置き去りにしたなんてことは絶対ないですからね。ただ、むこうが夢中になって逃げちゃったけど心配して戻ってきたということはありません。そういう相手がいと一緒に写真を撮れたというのは、作品(をつくれたこと)と同時に大変幸せだったと思っていますね。

写真への思い

私や私の周りにはいる人たちは、他の学校には行っても写真の学校なんて行ってないんです。それをある部分では誇りにしていたの。だって教えている先生も写真がうまいかどうか分からないじゃない。だから自分自身の表現をするんだったら自分が勉強する以外ない、そういう考え方ですよ。一生のうちで写真を撮っておいてよかったなということは結論として事実です。自分が表現したいものをフィルムでできるということはすてきでしたよ。



*7 奥村泰宏(1914-1995)。写真家。常盤の夫。



2016年12月14日 横浜市保土ヶ谷区にて
聞き手:齋藤 里紗(横浜市民ギャラリー学芸員)
編集:森 未祈(横浜市民ギャラリー学芸員)

幼少時代の思い出

母方の祖父が関東大震災にあい、その後大岡川のほとり(現:南区大岡)に居を構えました。そのときに家を建てたのが建築家だった父です。大岡川は東京の多摩川によく似ているということで、住むのに快適な場所だったわけですね。次第に周りに家が建ち始めて、中島(清之)先生(*1)は昭和5年に祖父の家から2軒おいた隣に越してきました。片岡球子先生(*2)は、その頃中島先生のところへ絵を習いに通っていました。私の家族は昭和10年頃から祖父の家に住み始めました。私はまだ小学校入学前で、片岡先生は非常に厳格なおっかない先生だというイメージがあったのでいつもいたづらをしていました。うちの門の上に桜の木があって、先生が来ると桜の木についた毛虫を棒で落として脅かしていました。毎回やるもんだから結構怒られました。

戦争になってからは疎開をして、戻ってきた(市立大岡小学校)5年生のとき、片岡先生に連れられて弘明寺の観音様に絵を描きに行きました。そうしたらなぜか職員室の前に私の絵が飾られました。弘明寺の私のうちからちょっと離れたところには画家の川村信雄さん(*3)がいらっやいました。弘明寺観音の先には志村計介さん(*4)という独立(美術協会)の絵描きさんがおられました。それから神奈川商工実習(*5)の裏のところに片岡先生が下宿されていてね。そこで絵を描いていました。朝6時くらいから小学校が始まるまで近所の花などを写生しているところをいつも見かけました。非常に熱心な制作態度で「すごいなー」なんて思っていました、そのとき私はまだ絵には全く興味がありませんでした。

師・中島清之との出会い、東京藝術大学入学

中学の時にですね、一橋大学の学生さんで独立美術協会に入選されている小林昭夫さん(*6)という方がいらしたんですよ。後にBゼミをやった方です。私は南中学の1期生なんですけれども、絵の先生がいなかったもんですから、小林昭夫さんが週に何回か来て指導してくれました。その後一旦Y校(*7)の普通科に入学し、1年の中頃に転入試験を受けてなんとか緑ヶ丘高校に転校しました。緑ヶ丘は1年先輩に芸術に進む連中が結構たくさんいたんですよ。夏なんかデッサンをやっていると時々見に来てね、先輩たちが通っているという川村先生のアトリエに通うようになりました。そこで藝大に入れたらいいなと思うようになりました。どうしても1年で(現役で)入りたいと思いついて悩んでいたときに、藝大の先生をしている中島先生が2軒おいて隣にいたので、お袋に連れられて訪ねていきました。中島先生は千波君(*8)が生まれて、しばらく経って疎開先の長野から横浜に帰ってこられました。だから私が知っている千波君というのはおしめをしていた頃なんですよ。まさか縁が濃くなるとは私も思っていませんでした。先生は「油絵は大変だよ。競争率が激しくて、日本画を受けたらどう」と言われ、秋頃日本画を受ける決心を



*1 中島清之(1899-1989)。日本画家。

*2 1905-2008。日本画家。1926~1955年大岡小学校の教員をしていた。

*3 1892-1968。洋画家。川村画塾を開いていた。

*4 1903-1992。洋画家。

*5 現・県立商工高等学校。

*6 1929-2000。現代美術ベシクゼミナール(Bゼミ)主宰。

*7 市立横浜商業高等学校の愛称。

*8 中島千波(1945年生まれ)。日本画家。中島清之の三男。

しました。冬頃に先生から「鳥の絵を描いたことあるか」と聞かれ、^{シギ}鴨の絵(*9)を描きました。ともかく細かく描けばいいんじゃないかと思って、一生懸命描いたんですよ。入学試験では小鴨を描きました。その当時提出画というのがあって、菊を描いたんですよ。いま下絵を見ると一生懸命真っ黒になって描いている。クラスでは日本画を経験していて、もう(画風が)出来上がっている人がいるんですよ。私は何にもわからないでね、かえってそれがよかったのかもしれないけれど。

画家・牛田雞村(*10)の印象

卒業して最初の年に私が院展に初入選した年に、横浜の野澤屋(*11)で日本画家の青紅会という会に出品しました。2回ばかり会合があり、その場に(雞村が)袴をはいて颯爽と来るんですよ。(院展)同人になっている人たちに敬意を表してもいいんだけど、そういうことには動じない人でなかなかかっこよかったですよ。絵もいい絵を描いていました。

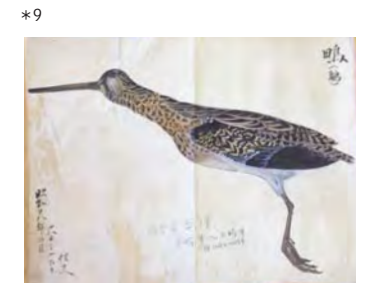
大学卒業後

卒業後路頭に迷っていたときに救ってくれたのが中島先生なんですよ。Y校の普通科が独立して南高校になったので、先生の紹介で2年半非常勤の教師をしました。その後校長に呼ばれて「専任教師を置きたい。君は高校の美術の教員になるつもりはあるか」と聞かれたので「やる気はあります」と言ったら「明日から来ていいよ」ということになって、結局19年勤めました。その後美術の指導主事ということで教育委員会に行き、しばらくたってから横浜美術館の基本構想委員会に、その後市民文化室に入って、美術館の建設が始まるわけです。

私は学生の頃からちょっと変わっていると言われました。絵だけ描いていればいいという気持ちになれなくて、何でもやりたい。例えば教師時代テニス部の顧問もやりました。10年の間に生徒を関東大会、全国大会に連れて行くという目標を立ててその通りに実現しました。ところが周りの画家はみんな脇目も振らずに絵を描いているんですよ。どうもそういう連中とは同調できなくて、さまざまなことをやってきたんですけどね。人に会うことが好きで、いろんなところへ行行って話をするのが好きで、そのことが知識を得るのを助けてくれたなあと思います。

自身の作品について

職業を持ちながら制作するため、風景や静物をそれぞれ描き、画面上で組み合わせる方法を考え出しました。ガラスの花瓶は教師をやっている時に教え子がお金を出し合って卒業記念に贈ってくれたもので、ガラスの中に染料が入った、当時は珍しいものでした。ストライプのテーブルクロスとの互いの色のうつり方に惹かれて、長年取り組んでいます。



*9

*10 1890-1976。日本画家。かつて院展で活躍したが、戦後画壇を退いた。

*11 かつて伊勢佐木町にあった百貨店。

《花(品濃一里塚)》1988年
紙本着彩 80.4×100.2cm



浅見 信夫(あさみ のぶお)
1934年 横浜生まれ
1957年 東京藝術大学日本画科卒業
日本美術院展に初入選
1958年 東京藝術大学専攻科修了
1961年 日本美術院院友
1966年 神奈川県美術展(以降4回入選、招待出品5回)
1967年 横浜美術協会会員
1981年 春雷展(横浜市民ギャラリー、同1983年)
1995年 個展(1997年、2000年、2006年他)
※その他展覧会多数

2017年1月11日 浅見信夫氏アトリエにて
聞き手:齋藤 里紗(横浜市民ギャラリー学芸員)
編集:森 未祈、齋藤 里紗(横浜市民ギャラリー学芸員)

出品リスト

	作家名	作品名	制作年西暦	技法	サイズ 縦×横 (cm)	
春	宮本 昌雄	春雪横浜山手之図	1995	紙本着彩	175.0 × 225.0	
	芹沢 龍吉	早春	1972	油彩、キャンバス	90.2 × 131.3	
	市川 勉	早春の大岡川風景	1988	油彩、キャンバス	60.8 × 72.9	
	入江 正巳	春光(三渓園燈明寺本堂)	1988	紙本着彩	65.4 × 91.2	
	江見 絹子	丘(山手から本牧方面を見る)	1988	油彩、キャンバス	66.7 × 100.7	
	林 敬二	横浜港	1988	油彩、キャンバス	91.0 × 116.0	
	益井 三重子	風薫る	1988	紙本着彩	128.1 × 72.2	
	添田 定夫	春光の横浜港	1988	油彩、キャンバス	97.0 × 130.0	
	平野 杏子	春林天	1981	油彩、キャンバス	129.0 × 79.0	
	三橋 兄弟治	港にて	1940	水彩、紙	57.0 × 74.7	
	小島 昇	野毛山動物園	1979	墨、水彩、紙	24.6 × 33.6	
	青木 四郎	大佛次郎記念館	1979	水彩、紙	37.1 × 44.1	
	池田 龍雄	種子	1989	シルクスクリーン、手彩色	27.8 × 32.0	
	池田 龍雄	萌芽	1987	シルクスクリーン、手彩色	27.8 × 32.0	
	小川 哲男	西洋床屋	1978	水彩、サインペン、紙	72.5 × 102.7	
	永井 保	夜の横浜大棧橋	1978	水彩、マジック、紙	72.6 × 102.7	
	秋山 亮二	「楯川村」より	1989	ゼラチン・シルバー・プリント	44.8 × 44.6	
	秋山 亮二	「楯川村」より	1989	ゼラチン・シルバー・プリント	46.5 × 44.6	
	夏	兵藤 和男	古樹新緑	1965	油彩、キャンバス	67.0 × 72.0
		北 久美子	1988年 夏	1988	油彩、キャンバス	91.0 × 116.8
寺井 重三		夾竹桃の咲く頃(横浜ドリームランド・エンバイヤーホテル)	1988	油彩、キャンバス	91.0 × 72.0	
松島 一郎		桃	1960	油彩、キャンバス	37.8 × 45.3	
田中 岑		窓外港 朝	1988	油彩、キャンバス	72.7 × 60.8	
益田 義信		巴里小公園	1974	油彩、キャンバス	45.8 × 61.0	
田澤 茂		夏物語	1984	油彩、キャンバス	163.0 × 163.0	
田島 奈須美		浜っ子	1988	紙本着彩	100.2 × 73.0	
中島 千波		蓮華	1988	紙本着彩	91.0 × 60.0	
牛田 雞村		薬街の夕(「蟹港二題」より)	1926	絹本着彩	63.0 × 112.8	
相笠 昌義		海水浴をする人	1989	エッチング、アクアチント	32.0 × 64.9	
園山 晴巳		HIKAWA MARU YOKOHAMA	1988	リトグラフ	82.0 × 57.6	
吹田 文明		花火大会	1988	木版	57.5 × 44.1	
市川 勉		山下埠頭	1979	鉛筆、水彩、紙	31.6 × 39.6	
島田 正次		花月園競輪場	1979	水彩、紙	26.6 × 39.1	
秋		櫻庭 彦治	風景(札幌秋色)	1975	油彩、キャンバス	45.5 × 47.0
		國領 経郎	真鶴風景	1967	油彩、キャンバス	91.4 × 116.7
		土井 俊泰	朝の埠頭	1988	油彩、キャンバス	91.2 × 117.0
		北岡 数彦	馬堀の午後	1975	油彩、キャンバス	91.5 × 117.0
		阪本 文男	帰ってからのアリスの遊び	1975	油彩、キャンバス	130.3 × 162.1
	中西 新太郎	鶴見川夕景	1988	油彩、キャンバス	91.2 × 117.1	
	浅見 信夫	花(品濃一里塚)	1988	紙本着彩	80.4 × 100.2	
	市川 保道	夕映(鶴見川)	1988	紙本着彩	117.0 × 91.4	
	海老原 暎	ベンチシリーズ 2	1975	リトグラフ	63.9 × 80.9	
	海老原 暎	ベンチシリーズ 4	1975	リトグラフ	63.3 × 80.2	
	長谷川 潔	飼い馴らされた小鳥(草花と種子)	1962	マニエル・ノワール	39.0 × 28.2	
	野田 弘志	“ポーターティラー” 1963	1990	石版	23.0 × 28.7	
	天笠 義一	日野公園墓地	1979	油彩、紙	36.5 × 47.4	
	茨田 茂平	秋の三渓園	1978	ペン、クレヨン、パステル、紙	72.6 × 102.8	
	入江 泰吉	斑鳩の里落陽	1976	カラー・プリント	73.4 × 93.2	
	入江 泰吉	長谷寺錦秋	1979	カラー・プリント	73.4 × 93.2	
	北井 一夫	川魚漁師	1975	ゼラチン・シルバー・プリント	25.5 × 37.9	
	北井 一夫	農家の少女	1970	ゼラチン・シルバー・プリント	25.4 × 37.7	
	冬	浜田 三郎	操車場	1988	紙本着彩	80.7 × 100.4
		安喰 虎雄	かに	1973	油彩、キャンバス	45.0 × 53.0
志村 計介		チューレリー公園	1967	油彩、キャンバス	53.0 × 65.0	
添田 定夫		礼拝に行く聖女たち	1958	油彩、キャンバス	112.0 × 162.0	
中谷 龍一		山手風景	1988	油彩、キャンバス	117.0 × 91.0	

	作家名	作品名	制作年西暦	技法	サイズ 縦×横 (cm)	
馬場橋男の横浜百景	村上 善男	R気団 76-7	1976	アクリル、コラーージュ、キャンバス	194.0 × 130.0	
	高松 次郎	宮沢賢治「水仙月の四日」より 日暮れを待たず雪婆んごがやってきた	1984	シルクスクリーン	47.7 × 66.4	
	高松 次郎	宮沢賢治「水仙月の四日」より 空に舞う雪の化生たち	1984	シルクスクリーン	47.6 × 66.5	
	高松 次郎	宮沢賢治「水仙月の四日」より 赤毛布の少年を封じこめる吹雪	1984	シルクスクリーン	47.6 × 66.4	
	高松 次郎	宮沢賢治「水仙月の四日」より 雪は夜じゅう降って降って降ったのです	1984	シルクスクリーン	47.6 × 67.0	
	若江 漢字	winter	1990	ステンシル	63.7 × 48.6	
	小林 裕子	90.12.9	1990	リトグラフ	65.5 × 59.1	
	ヒサ クニヒコ	三渓園雪景色	1978	水彩、マジック、紙	102.5 × 72.3	
	小島 功	サンタ横浜上陸	1978	アクリル、グワッシュ、水彩、紙	102.7 × 72.7	
	葉袋 勝代	中華北方獅子	1991	カラー・プリント	54.8 × 36.8	
	浜口 タカシ	馬ソリ	1976	ゼラチン・シルバー・プリント	33.2 × 48.9	
	馬場 橋男	横浜百景	1980	木版	16.2 × 11.3	
	馬場 橋男	弘明寺にて 初詣	1977	リトグラフ	13.2 × 12.3	
	馬場 橋男	称名寺 初詣	1977	リトグラフ	14.0 × 17.5	
	馬場 橋男	おみくじをひく 弘明寺境内にて	1977	リトグラフ	12.0 × 7.7	
	馬場 橋男	初詣で伊勢山神宮	1978	リトグラフ	31.1 × 22.1	
	馬場 橋男	冬の開港記念館	1979	リトグラフ	41.0 × 30.1	
	馬場 橋男	遊覧船	1979	リトグラフ	15.8 × 24.5	
	馬場 橋男	横浜公園にて(横浜球場裏)	1976	リトグラフ	21.3 × 29.6	
	馬場 橋男	平潟湾 八景にて	1977	木版	26.5 × 37.4	
	馬場 橋男	初夏の三渓園	1977	リトグラフ	24.6 × 33.0	
	馬場 橋男	空港への道 新子安あたり	1979	リトグラフ	25.6 × 35.5	
	馬場 橋男	中華街にて	1979	木版	19.8 × 24.3	
	馬場 橋男	枯木の風景 能見台付近にて	1977	リトグラフ	33.7 × 25.4	
	馬場 橋男	夕暮れの十番館	1978	リトグラフ	24.5 × 30.5	
	馬場 橋男	横浜駅ホーム ルミネ8Fより	1982	リトグラフ	15.0 × 36.8	
	馬場 橋男	秋の日本大通	1981	リトグラフ	23.5 × 31.0	
	馬場 橋男	横浜みなと祭 第36回国際仮装行列2	1988	リトグラフ	49.1 × 61.5	
	馬場 橋男	横浜博覧会の図(中国の船)	1990	リトグラフ	50.3 × 61.5	
	戦後のひとまち(常盤とよ子・奥村泰宏)	常盤 とよ子	窓 日の出町裏	1955	ゼラチン・シルバー・プリント	25.9 × 39.6
		常盤 とよ子	真金町遊郭初店	1954	ゼラチン・シルバー・プリント	26.6 × 40.5
		常盤 とよ子	赤線の女一横浜	1955	ゼラチン・シルバー・プリント	25.4 × 39.2
		常盤 とよ子	赤線地帯一横浜	1955	ゼラチン・シルバー・プリント	25.4 × 39.1
		常盤 とよ子	お六さん一横浜	1968	ゼラチン・シルバー・プリント	25.4 × 39.0
		奥村 泰宏	職を求めてたむろする失業者・野毛町桜橋	1949	ゼラチン・シルバー・プリント	34.4 × 34.5
		奥村 泰宏	米軍兵士と老人	1952	ゼラチン・シルバー・プリント	34.5 × 34.5
		奥村 泰宏	似顔絵描き	1950	ゼラチン・シルバー・プリント	34.6 × 34.5
		奥村 泰宏	日ノ出町	1952	ゼラチン・シルバー・プリント	28.7 × 44.1
		奥村 泰宏	マッカーサー劇場 野毛町	1952	ゼラチン・シルバー・プリント	29.4 × 44.7



謝辞
この展覧会を開催するにあたり、多大なご協力をいただきました
次の個人、関係機関に深く感謝申し上げます。(敬称略)

相笠 昌義 櫻庭 慎吾 林 敬二
秋山 亮二 篠崎 京子 吹田 文明
浅見 信夫 園山 晴巳 宮本 太郎
牛田 雅彦 高橋 富久子 村上 美智子
小川 文司 常盤 とよ子
北 久美子 野田 弘志 入江泰吉記念奈良市写真美術館
栗林 阿裕子 馬場 洋子 株式会社コオプロ
阪本 透 浜田 ハル子 ホキ美術館

学芸担当: 齋藤 里紗、大塚 真弓、森 未祈
執筆: 齋藤 里紗
デザイン: 北川 正(Kitagawa Design Office)
印刷: 山陽印刷株式会社
インタビュー映像制作: 播本 和宜

編集・発行: 横浜市民ギャラリー
(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 / 西田装美株式会社 共同事業体)
〒220-0031 横浜市西区宮崎町26番地1
TEL 045-315-2828 FAX 045-315-3033
http://ycag.yafjp.org/